



早稲田大学図書館
文書27
D 25



養浩堂藏書

明
崇禎
五年
戊寅
十月

日之雜集

養浩堂藏書

養浩堂藏書

管聲波清近先難中并拂紅袍及水仙色是從來都

教

教

不見城隍形多肘乍看世正批色枝此色妖豔何所
似之是海世無人步年營似陰春嬌豔媽如咲欲媚得
憐爾為嬰娘眉姑首姿艷色何人而能令欲無所年齊
浪來林下自車溪 征歲誰折江南采寄入心似烟客題

友批

蓬瀛何處在漢橫橋去還借問水仙色何時隨人出
方蓬波州以為商人寰願在伴汝去早晚竟之山

友水仙

荏以德 祥藁

初為高祖劉室見于款

大華

墨酒草堂無異符 飄風醉態似高風 醉罷一破盃五之也

初為高祖劉室見于款

初為墨酒 海州 時吹涼有東歌新

墨酒草堂之運因修年定歲極辭攀 亦既一睡志休矣
欲逐火之係至寂寞

本村丈八 九月十六日

阿婆子うのまろ先いへるしに村の所 江後人よりまろ子
たろていゝのうのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろ
有存之修しまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろ
有存之修しまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろ

有存之修しまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろ
有存之修しまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろ
有存之修しまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろ
有存之修しまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろのまろ

たつたて

ナク

大い後

年六

古橋平太夫

尾山出陣の如く此の如くは、
あつたての如くは、
いふ所は、

夕顔

いふ所の如くは、
青田

痛きうき神の如くは、

あつたての如くは、

いふ所の如くは、
あつたての如くは、

葉科書

あつたての如くは、

毛人書と一書と、
朋輩檀君、
別部美世、
花より月、
中心側

あつたての如くは、
あつたての如くは、
あつたての如くは、
あつたての如くは、

右一葉

江松伯行

研古堂金掃 十月十日

黃葉無風自舞。秋雲多處長陰。天若有情天亦老。搖尾出林猶恐。惆
 悵何人。心多。買來無處進身。此若方家之寶。經使吾家之田。
 竹外窺鷓鴣。樹外窺水。若外窺雲。難道我有志無志。鳥來窺人。月
 來窺酒。鳥來窺書。却看他有情無情。雪後初梅。霜前初菊。意
 後蒙風。外疎林。固窮客。閒情。實文人。人深趣。人有不及。可以情
 態。些些相干。之以理進。佩世為言。是以游世。冬起欲進。夏起欲早。
 春睡欲足。午睡欲安。前事皆易。後事皆難。惟讀書終身之業。人何不
 以心為一。念如之。甚。但有花開。無言人。是此。莫感涼夜。更
 幻泡影有限。且約樂事。風不與月。之。舉。竟伴。書。為。之。身。介
 去。眠。寂。安。黃花似樹。春不如秋。白雲青松。亦勝黃。去。交。園。林。秋
 冬。山。衣。一。心。意。累。累。良。辰。年。事。無。奇。對。人。語。刻。愛。床。俱。清。鳴。啼
 便。飲。花。有。之。云。花。底。酒。危。有。薄。意。山。回。秋。幽。山。回。春。高。山。回。雲。年

經事之不可使
 人見。則飲食俱
 穩。
 雲反便悠共遊。
 雨滴便於然俱清。

月。古く君子美則友松竹。作善友則友雲山。余美則友古之
雲山。亦雲山者。子載善道。之如好善良友。一生清福。只在石
爐烟。 金谷樓事。業有好書。飽食晏眠。時清體健。此是上等之人。

亦六日

國新の紙

水書越法して天書守り。鳥免奔馳して物更更。法は御法十年の旧書を
飲めて將に全徳之夏の彩白を連へん。と其の志を成りし。と云ふ
一國由まよ飲ち。と云ふ書書安さう。と云ふ考も六万才を。因り事何
心室の灼燐さ。母邦と云ふ。あくさう。之く枕帯の研誦。と云ふ。おし
たくり。うら。浪のれ。お。夏。白。の。面。色。と。共。ま。ま。く。公。使。の。紙。士。族。の。人。情。同。く
席。石。室。の。心。ま。お。寝。く。ま。れ。く。傳。共。年。し。ま。山。師。の。海。世。を。今。は。し。る。を。共。ま。
教。令。不。息。と。切。つ。て。天。堂。を。後。付。し。市。中。の。目。を。偷。入。て。地。獄。を。ま。か。り。し。時。年
高。い。不。母。の。國。新。の。紙。を。年。の。出。の。紙。を。し。ま。後。の。書。時。ま。ま。く。月。の。

将月を句で重歌法なり。一宗や其や並居意を晴ま。と云ふ。海ま
ま。れ。と。松。や。ま。や。休。目。休。滅。と。れ。し。何。と。食。り。ま。よ。所。ま。ん。練。筆。教。え。り。て
俄。免。の。紙。を。う。と。這。ま。切。條。幅。狭。く。して。山。師。の。紙。を。う。と。此。し。利。害。の。利。害。の。法。文
丈。り。よ。う。う。傳。傳。の。玉。ま。の。身。付。味。く。ま。り。と。惟。傳。の。法。の。志。く。と。し。時。の。ま。ま。と
卷。高。の。紙。の。寛。り。う。め。ま。し。首。の。わ。ら。う。紙。論。も。後。法。法。を。り。と。し。て。紙。を
此。央。の。天。堂。を。後。ま。今。の。懶。軟。百。万。を。ま。ま。く。通。海。學。士。の。履。履。を。掛。く。掛。く
紙。の。傳。の。多。の。如。く。紙。を。し。ま。し。休。家。の。紙。の。紙。を。し。ま。し。と。云。ふ。と。い。う。と。女。房。の。志。を
質。院。の。湯。水。を。通。海。流。ま。草。流。ま。身。の。の。ま。ま。心。妻。底。の。幾。年。の。抄。紙。碑。の。湯
碑。の。抄。紙。の。ま。ま。の。紙。を。し。ま。し。と。云。ふ。と。い。う。と。女。房。の。志。を
む。ま。の。紙。の。紙。を。し。ま。し。と。云。ふ。と。い。う。と。女。房。の。志。を
ら。と。抄。紙。の。紙。を。し。ま。し。と。云。ふ。と。い。う。と。女。房。の。志。を
ま。ま。の。紙。を。し。ま。し。と。云。ふ。と。い。う。と。女。房。の。志。を
亦。て。肝。心。を。ま。ま。の。紙。を。し。ま。し。と。云。ふ。と。い。う。と。女。房。の。志。を

其の或見身一の勢も漫く其後文物の片模倣上其
動かしや其長はと學ぶものも其隣國の巨匠なり
との少て且其海を爲て人情風俗相とすとのやも其
その耶の通もして其學を其利を其の要と爲る形
の舊國を洋
後其の爲地たるは其種も其の後悔願を運じの
其の

下九日

故越後上杉謙信神道碑

室町氏之季。群雄競起。閔智角力。各雄視一方。而其信義暴
白。遠近倚重。數百歲之後。溘有生氣者。獨推越後侯上杉謙信。
侯行事之概。戰鬪之狀。炳耀史冊。無復俟紀述。然其事之大者。
或乖其實。而其高義未盡傳于天下。碑銘之不可以已也。侯諱
景虎。後更輝虎。本姓長尾氏。父信濃守為景。為叛者所誘。殺族
人俊景。又殺其二兄景康、景房。而長兄晴景為賊所擁。侯時年

十三。擔欲復父仇。靖國亂。走保椽尾。晴景亦脫賊中。與侯合。賊未攻
侯。出擊大破之。斬俊景。後又討殺父之賊。盡誅之。晴景雖兼嫡宗。性
多病。征討之事。一委于侯。叛亂既平。遠近歸附。侯威名大顯。宗族諸
人。必謂有兄篡國也。使數反。固執不可上。杉實自為景時。主越後。使人未
諭。曰。子違衆則人人解體。國必再亂。於祖先父兄不孝。莫大焉。侯不得已
從之。入府城攝國事。時天文十七年十二月也。然事必稟定。實而行。欲待
兄子長傳之後。數年。晴景病歿。其子亦大。侯為建寺號華岳院。今見存。
云。而傳者曰。侯與晴景構兵。晴景遣族政景攻椽尾。侯擊走之。政景降。
晴景自殺者。誤也。俊景被誅之歲。政景伺府城空虛。率兵來襲。中條藤資
擊卻之。侯與晴景連署。與功狀。藤資其書亦見存。則傳者之為妄也。明矣。
侯天資英武。俊重信執義敬于事。上當是時。甲斐有武田信玄。相模有北
條氏康。尾張有織田信長。吞噬隣近。務拓其疆土。而侯則扶弱以抗強。削平

叛亂而已故其與信玄敵也以庇村上義清等與氏康戰也以復上杉憲政三好
松永之政扈於輦下率兵入衛事必仗信義未嘗與無名之師是以雖仇敵亦
皆知其可依賴信玄謂勝賴曰吾死汝以國托謙信彼一受托必不侵汝信長
亦曰公義人也信長所辛苦經營必不見奪而氏康之質其子侯即收以為己
子欲傳之國仇敵猶且如此而豈奪嫡篡國之事邪且侯之所為每與信玄相
反信玄逐其父侯則誓復父仇信玄忌其子殺之侯則視他人子猶己出信玄多
取人妻女侯則一生絕內信玄不知有天子將軍侯則朝覲數次備輸誠款鳴
呼戰國之世信義各分蕩然墜地侯出於北鄙首輔佐幕府護衛朝廷是其義
聲固足以鼓動天下乃若信長亦勸其所為假焉以濟其私爾顧侯不幸早捐
館舍不能達其志業然武田織田諸族率皆一再傳而亡獨侯之裔雄鎮于
東北綿延三百年之久者豈非以其高義孚于天人故歟侯以天正六年卒
于越後春日山政景子景勝嗣後徙封會津又徙米澤至明治四年藩廢其明
年舊藩士庶請于朝建侯祠見允賜號曰上杉神社列縣祀前此百五十年

享保丙午彥根藩人數名請于卜部氏設侯祠於美濃瞻葺山彥根與米
澤其地懸隔其人又非與侯有緣故而百歲之後祭祀以事之非信義感人
之深其孰致之初侯之卒遺命作石櫬安遺骸其中置于治城每轉封隨徙
前國主齊憲與前知藩事茂憲謀安之米澤城西先塋內而碑文未刻今茲
四月值其三百年祭以文見屬予乃擬侯之事蹟史傳所未載及失其實
者論述如此而系之銘曰
白布巾朱柄麾臨陣萬人辟易是豈徒勇之所能為義感仇敵信及豚魚
侯之不可及其在此歟

明治十一年四月

重野安繹稿

二十下

大江匡衡與朝士泛舟於大井河各詠和歌匡衡乃作歌寓沈滯之意
歌云 加波市祢耳能利意古古能由玖登岐波志到流美登毛於毛波佐利計利
凡河内躬恒善和歌與紀貫之土生忠岑等並稱其家有櫻樹每花

國曆二十二年
二月一日

盛開賓客埽門躬恒有感於世態作歌曰 和我邪鳩能波奈美我底羅
珥玖流比斗波知利奈半能知曾古比志加流倍喜

かゝりくわいし方々わろ眼のりその中より其のまゝ

大概終後何凡天りく物有とるが末有と而る終末は信我は信我能
志能速列恩の事。是名とる常也。は信得妻。是是得。志佳利愛私
く半。是名とる常也。為先其はる若末。而る志其はる。常也。是為
志名は名也。

あつては種の花あつてはつて

海羽の歌

あつては種の花あつてはつて

花月歌集

あつては種の花あつてはつて

あつては種の花あつてはつて

あつては種の花あつてはつて

あつては種の花あつてはつて

あつては種の花あつてはつて

あつては種の花あつてはつて

海羽の歌

あつては種の花あつてはつて

あつては種の花あつてはつて

あつては種の花あつてはつて

海羽の歌

あつては種の花あつてはつて

海羽の歌

海羽の歌

あつては種の花あつてはつて

あつては種の花あつてはつて

聖武天皇皇孫。清光の皇子。清海公。其等才三女也。親魏妹。繁以有之。耀故在。幼而聰慧。及長。善書。屬文。化俗。風俗。曰。行好。因良。易以得教。君賢。其。易以至也。道使。之。使。多。收。會。情。正。志。之。言。漸。心。洋。耳。二。志。多。心。清。明。所。祐。祐。福。之。門。也。人。不。拍。父。母。不。孝。之。心。明。君。不。細。不。無。之。良。清。矣。長。樂。濁。安。恒。意。孝。而。竭。力。忠。則。是。今。下。君。臣。不。信。必。致。不。安。父。子。不。信。必。致。不。睦。

後文
家三
尾形籠かまき清やらん初がごと
初東風の来りや玉藻の初くま

麗くひの月うごころの思かま
ひかたははる代後や初日のこ

若ぬや祀老の浮世の傀儡作
道月の思いつくと初曆

こはぐよはく形かてけら性
栞てわらやうで柳のまきしき

新筆執筆
そりしつる筆をさる人よひくせのそられゆくけや定らん

故かぬ身より袖水と娘くさのな不似し何年かまきり

古の年十月二夜は戸地たよ春を懐くもあゆ懐き法後の都士民のを
念削りし者こそ舟具の大火何れ昔聖武の若士方へふさくとも水産高
危の助し登りしと危の助東湖とまると其人とあり懐解りてさ良後と懐き
情く善更よ海りむ初之よ長一果東文壇の潤敷うり水産高納を供して戸田
忠経より取映たり天保甲辰正月公の幸ふ所一衆を幕府上海り禁烟
せしむる事二年而して後省さるるにふはせてはるま何れ昔や地産とまきり
忽り池くくも無意のうらむと保りしとを海りわくしと公も不列を倒し遠く
登りて二年甲辰大納使の若かり大よ世は初り

元年丁巳正月十日長尾重高の氣入かここ上書して曰く昔も山子次田頼経長
清の之港と云ひく昔其末の二由よ海を清り身も重物を清り昔も其書を
たかきとてしこまを清りておとさるるに而して未だ佛人のまると聞かれし
是し釋月をわくしてまきりし昔も山子次田頼経の氣入かここ上書して曰く

の後悔更らざるやえ事貴人の方法の内一徳し注めりて垢民の英傑
の老々しし形必の影くまふ而も此之得し東方名山の人大概自ら其
の経路を知りて候他を疑ひの癖有りともやう余にもまよふ
次第して之を憂ふるも頗る苦癖有りともまし候所の事と候し其を
くの春とてらん暮るる那のやまも世傳の端して片の札を記したる其
矢ひ面今も守りし昔昔書とて先づ其貴人の國名を存せしむ候海客の
たれにまよふ心と候まよふと候んや

明治七年戊午二月五日高尾山遊記 勅書

汝之先述日理の形傳とて其の自の所を白紙に記し候し陣と
朕も亦知し事情を感取令や而も其筆に陰朕の在右様とて候し
能く事情亦止と傳り候し其の旨く候し其筆に力と湯と
候し其筆に力と湯と候し其筆に力と湯と候し

以思名鹿多島に本をす事 戊午二月五日

神皇正統記 春日回詠 高尾山

春日 二月五日 高尾山 高尾山 高尾山
雲雀 二月五日 高尾山 高尾山 高尾山
初意 二月五日 高尾山 高尾山 高尾山

世事情

吾廬如地底 埋没を金く天隈有入る 麓頭開展を 奇景奇思
頼之樹之節名 藤字一子春 高尾山の人 山陽集の書よりして 山陽の
宗師之節名 高尾山 藤字一子春 高尾山の人 山陽集の書よりして 山陽の
と云候ち又古れしと号に 高尾山 藤字一子春 高尾山の人 山陽集の書よりして 山陽の
さよふ幕府之と者さんと號を而して 藤字一子春 高尾山の人 山陽集の書よりして 山陽の
吾幕廷よりや 藤字一子春 高尾山の人 山陽集の書よりして 山陽の
高尾山の人 藤字一子春 高尾山の人 山陽集の書よりして 山陽の
高尾山の人 藤字一子春 高尾山の人 山陽集の書よりして 山陽の

本幕若助守りたるを論議して 定次所守を河野と云ふ松陰も号し又二十四
極中より河野の甲斐の武蔵の旗を掲ぐよりあつて御より銀若守云々を
竟し卒に御世の志願せらるり戊午の志天候下り海内未く揚ふは
去歴富強して將ふを前らんとて而して幕府勅命を奉せん其旨
遂に英米等より金に上り松陰もを國を奮起止むる病より幕府
河野治勝と云ふを高橋の有志を唱ふる事と批す松陰乃て之を答へて
回老を善り自國を服して上京し之を復して其の時を得たるを奉せん
て少し幕府之を國を其の病を今にしては松陰送すしと後々松陰も
昔遊了刑よりと享年二十九松陰詩文より巧なり其因流多總流を其
初に去歴河野治勝と云ふんとて國を服する事も其父よりして曰頭史
能方制のれ果して其典を批しては松陰也といふより松陰九年を松陰の
死して其の事多くしてあるは松陰といふ今日其事と松陰の事
罪何と云ふ之に松陰の御守り方今其事河野家の存ても保つた云の事傳し

實り幕府より河野の御守りたるを論議して 定次所守を河野と云ふ松陰も号し又二十四
極中より河野の甲斐の武蔵の旗を掲ぐよりあつて御より銀若守云々を
竟し卒に御世の志願せらるり戊午の志天候下り海内未く揚ふは
去歴富強して將ふを前らんとて而して幕府勅命を奉せん其旨
遂に英米等より金に上り松陰もを國を奮起止むる病より幕府
河野治勝と云ふを高橋の有志を唱ふる事と批す松陰乃て之を答へて
回老を善り自國を服して上京し之を復して其の時を得たるを奉せん
て少し幕府之を國を其の病を今にしては松陰送すしと後々松陰も
昔遊了刑よりと享年二十九松陰詩文より巧なり其因流多總流を其
初に去歴河野治勝と云ふんとて國を服する事も其父よりして曰頭史
能方制のれ果して其典を批しては松陰也といふより松陰九年を松陰の
死して其の事多くしてあるは松陰といふ今日其事と松陰の事
罪何と云ふ之に松陰の御守り方今其事河野家の存ても保つた云の事傳し
實り幕府より河野の御守りたるを論議して 定次所守を河野と云ふ松陰も号し又二十四
極中より河野の甲斐の武蔵の旗を掲ぐよりあつて御より銀若守云々を
竟し卒に御世の志願せらるり戊午の志天候下り海内未く揚ふは
去歴富強して將ふを前らんとて而して幕府勅命を奉せん其旨
遂に英米等より金に上り松陰もを國を奮起止むる病より幕府
河野治勝と云ふを高橋の有志を唱ふる事と批す松陰乃て之を答へて
回老を善り自國を服して上京し之を復して其の時を得たるを奉せん
て少し幕府之を國を其の病を今にしては松陰送すしと後々松陰も
昔遊了刑よりと享年二十九松陰詩文より巧なり其因流多總流を其
初に去歴河野治勝と云ふんとて國を服する事も其父よりして曰頭史
能方制のれ果して其典を批しては松陰也といふより松陰九年を松陰の
死して其の事多くしてあるは松陰といふ今日其事と松陰の事
罪何と云ふ之に松陰の御守り方今其事河野家の存ても保つた云の事傳し

一朝遊戲之筆
為千古不披文
字正是空中造
五風樓手啟

獨身度日之事也。以筆作畫之舞。為獨好遊之樂。且是為遊之樂。是
歲窮之日。青雲之上。と清し。蓋し大賢を得る。と云。史し。一ひ。草芥の微。臣
と。有。天子の命。和。と。有。事。何の業。う。之。加。入。ん。且。因。此。以。信。大。京。宰相
七世滅。徳。の中。大事。を。著。し。得。り。り。其。意。切。之。史。皇。子。孫。を。さ。り。り。人。や。心
以。之。信。し。て。後。に。膝。下。の。教。を。聲。を。傳。へ。と。史。し。之。孝。不。弟。の。事。を。信。意
父。兄。之。情。を。信。し。て。心。を。改。ま。す。改。ま。す。と。云。上。に。信。を。進。て。所。思。得。ん。と

親視親球詩

浩齊

天宮遼闊。天宮。高。遠。能。振。翮。去。翔。舞。泰。而。氣。球。彩。極。巧。射。之。空。際。舉
神。鴻。毛。枝。葉。由。來。功。室。製。一。球。中。徑。六。計。箭。殺。為。衣。包。舉。周。結。徒。為
網。錫。維。細。下。繫。鈔。鐵。漫。藤。林。中。也。一。人。双。旆。揚。排。空。冲。氣。騰。起。須。臾
直。上。白。雲。鄉。列。子。冷。風。可。冰。雷。高。聲。雲。如。舞。捷。似。王。為。控。鶴。舒。快
如。梅。福。高。雲。去。下。界。作。親。齊。拍。手。人。小。如。蟻。球。必。中。盤。旋。矢。矯
步。空。中。音。笑。而。飛。之。應。毛。高。交。手。卷。日。色。為。俯。瞰。東。京。渺。博。野

如快馬斫陣
出勢不留

張星時過耳
順其雙劍如

沈梅史曰高健
深石子幾與高
岑慈恩塔詩
抗千矣

黃公度曰奇思

跳出。寰。笑。向。天。把。臂。神。仙。遊。碧。落。轉。憶。長。纜。繫。太。牢。孤。負。元。龍
羞。年。豪。氣。將。四。龍。都。解。脫。十。洲。之。為。任。遊。散。一。霎。飛。如。燕。子。穿。空
胡。等。因。遣。滄。海。一。粟。去。一撮。男子。深。丸。俱。抹。撒。奇。觀。妙。世。空。子。休。豎。亥
不。步。夸。父。傷。電。激。早。地。瞥。眼。了。日。將。月。取。箇。頭。喝。裊。然。一。陣。思
風。吹。隨。底。器。刺。難。超。拔。我。因。想。入。非。之。表。亦。欲。騰。空。駕。雲。起。上。空
雷。震。洞。女。牛。前。有。高。橋。人。列。於。中。途。為。後。過。浩。早。還。甚。解。宗。通
姓。氏。夜。來。飛。入。夜。寒。之。香。飄。桂。子。我。在。同。前。身。今。足。是。人。氣。月
娟。相。見。話。新。衷。玉。兔。勸。我。長。生。藥。苦。別。笑。我。之。龍。鏡。徒。霧。霞。裳
羽。衣。曲。抱。得。嫦娥。下。九。章

新次去歌

鴻

氣。成。之。上。何。焉。文。些。大。鵬。月。翔。舞。因。身。忽。為。塔。虛。空。飄。風。浩。風。輕。而。毛
風。從。洋。人。好。彩。製。馬。歌。瞰。堂。抱。新。針。或。為。字。日。檢。度。扶。又。閱。聖。地。抱。細。髮
縹。渺。空。像。臨。一。杖。下。秋。塵。七。氣。揚。磅。礴。乾。坤。膽。亦。大。何。本。區。之。君。於。人。王。良

其想更入非亦
層大亦精微是
不可思議功德也
康樞仙曰窮極
獲僧出入思識
見之步韻為難
得是得以一莖
草現大六金身
者

燕山曰堂二大篇
言尽無餘蘊矣
入曰余嘗詠氣
地作七律一首其
聯曰三千不用神
通力九方已從噫
氣吹陶侃放心
遊碧落日蓮入
定綾須弥金夏
此兩篇不復思
氣球詩

造父誰能御一掌能行天云紫秦阮村氏稱遊歐明日去五大洲何處去
色界九霄一回顧大塊圓轉小乾坤金丹三服仙不學度宅府中任
一走秦函信仙何浮薄浪賦龍舟出禁郭錦帆難逐逐暈白笑教道
士制中蓋萬術由佛志堅牢不似中土世衰帝力難得神返力於身誤
回恐急教世時多劫遊天多士界之子益週遭浩伊淨七任簡撮煩惱百
回抹撮十方億劫頃刻間雲霧迅捷遭飢渴面強斷臂羊豕迂悟道何
須支連喝慈明上堂啟事若同袍在否為家不藉奉願欲摧按巧異其執持鐵表
百舌却身飛起佛力如此球力大厥能徹七莫若世六德教斷像未
何持戒行學釋氏上矣蓮臺七寶宮世上正覺弘勒同寄言娑婆老
癡漢為說捷徑伸愚衷我本隱士無遠志何願皇家粟萬鐘若劉阮不
還仙地欲入天台雲幾重

梅軒明公以勳齋感晚賢而好學屬撰此歲勉應教

勸學箴

沈文煒

廣士不學道義亡知富貴不學崇高則危學務其大勿為卑靡學
守其正勿矜新奇明理達用宣繫文辭往事是監古訓是師
虛心聽受成德之基溫恭有恪庶無怨咨保家孔難勿怠以嬉脩
齊治平朝夕念茲

明倫彙編家範典

勸學箴

沈文煒

廣士不學道義亡知富貴不學崇高則危學務其大勿為卑靡學

沈文煒

月此山猿うかが若て西氏はあらやとは走らならん
君の世の走らならんをみるにはあらやとは走らならん
君の世の走らならんをみるにはあらやとは走らならん
あまれる日のあらやとは走らならん
あまれる日のあらやとは走らならん
あまれる日のあらやとは走らならん

地をよめいありつらうと世にけはせ世にけはせとらん 吉乃徳(吉乃徳)

題名 正位 正徳元(正徳元)

この君のお代とおまらふらうむれ年のことりや何とていせん

題名 従七位 近衛(近衛)

人みなのお世とてこほくまのまの養をこまこめてたほふらん

国府(国府)

水香凝結してたま字ち鳥免を逃して地を文へ 元正明治五年の四曆
と歎そ將に合球を典の彩白と匠へんことと其や成りててとま
ハ二回あすかたつこし其音あがりこむを考も六丁半甚く困りまら
正金の灼煙らる世邦をまて女ふらうしく播磨の朝とる利別まててま
うりる世のれらも馬のむまて昔ま青く云使の成り士族の人情は
為し石室の明家様へんし備り若軍まて山師の海世免るれれを共
教ふら鳥を物つて天皇を後まて市中の目と信んで地獄をまらふ

事いん世の困窮も迫るや年か出のなれさうし米後の不勝ふさうく月か指
又分りくま歌法らあう一屋や母や直屋をと勝もて焚くとも海ま
まらと垣や大まや井田金減とまて何を食らともはくもん焼年敷
くくして飯もべれうとほく切候幅狭くして山師の成りて此れ利益の報
ハ説文よりより信成のまの身代出らうめを懐簿の法に書てりん
浅くまくと巻書の程にまかるとまきし首よりけし論より後世法を
くして新巻紙共の天皇と権も今も饑餓百方をまてまて経海学世に
扶く掛らる徳島のおく形もまてまてけれは成の成りてりん
女房の長大息質元の流はまも徳流まも徳流まもそのまもまも
まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流
まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流
りともつて青い鼻流まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流まも徳流
流りてらるま一掬の清後と輝りてりん世の徳流まも徳流まも徳流

去るの精剛一騎
去るの勇夫
常上院様
遊浪
若者
諷
諷
動
ハ
使
何
宴
禮
眞
今年亦復夢中
過人
共歲華
知代謝
唯有碧翁
情甚佳
半輪
明月照
除夜
已卯新年
慶賀無煩
歲靜釋
先呼杯酒
次吟詩
我家佳客
書千卷
此座上
賓梅

戊寅除夕

梅外仙史 長

南橋散史 拜

一枝論未盛衰
未任公等問安否
到有鴛兒閑居
亦是昇平澤
起向東
擔揭國旗
又
秋田吟客 夫野

短柳疎梅未着鴛
迎年杯酒祝昇平
朝来一線新春意
早向楊花結底
生
又
鐵腸醉士

此生孤女共誰親
林下又逢三十春
一朵寒梅香未綻
愛他風骨太精神
文之今年七月十日
夜系師のく浪言多
杜依
伏久
川修
修
中
中
二
傍
騎

かん道盛之と照人一為したん

野史氏曰西山の英行は智勇を兼備せざるものなり故に能く創業
守成の大功を成すの事なくははたし難し其の功を成すに足る文治元年
の境に近きしむ北郡を以て入寇すと智勇ある事成たり其後
智勇ありて西吉を以て能く之と争ふ事と獨り能く事成たり其
つら今と出づ二十年平治の洋去と能く之を成す事成り
都賀山等の功と云ふは其の功を成す事成り而して由縁と云ふ
大に因縁を以てはらんとして半及びとして世傳ふ事成り
今も其智勇を以て能く之と亦其の功を成す事成り其後
のく傑出能く之と能く事成り

少淑秀始の歌

秀代と云ふ代はし教の自と年代始のあまふなりなり
あまがきうと云ふて志松の代へはゆきと云ふなり
法師法在中山其徳
養子三位法少淑者長

秀代と云ふ代はし教の自と年代始のあまふなりなり

法師法在中山其徳

大正代の年此始と云ふ事と能く事成り

養子三位法少淑者長

大正の権威はまねくあまは道と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

大正の年の始と云ふ事と能く事成り

法師法在中山其徳

後云つ流し追ふ、年なれど、名成り君の物ありけり

小山榮

○はるも、也思ふ、日月のふりて、人の命り、まことと色り、ゆゑに
柳正成、乳字多聞、河内人、左大臣橋諸兄之裔也。世居金剛山西。嘗平土
寇、以功為兵衛尉。元弘元年、後醍醐帝避北條高時兵、幸笠置。下詔
四方勤王、莫復應命者。帝憂迫、適夢紫宸殿前有大樹、南枝最榮、樹
下設虛位、二童子未、垂泣白曰、天下無地容、陛下独有此座而已。既覺、自
念、本傍南即楠、當有姓柳者出、戡定禍亂。因召山僧快元問之、對以正成
帝謂所夢殆是、乃使藤原藤房召之、託以討賊興復之責。正成感激對曰、
陛下苟聞正成未死也、則毋復勞聖慮、乃拜辭退。急城赤坂、將迎、駕於城
中、版築方畢、會笠置陷、賊乘勝奄至、為正成所敗。於是築營環城、為持
久之計、而城中食竭。正成乃陽為焚死狀、乘風雨夜逃去。匿金剛山、賊謂正
成真死也。使湯淺定佛代守其城、引兵東去。二年夏、正成以兵五百出、急
攻赤坂城、定佛狼狽出降。正成并其兵進屯渡邊橋。京師震駭。明年春、

高時大發兵、自三道來攻、稱八十萬。正成城金剛山、千創破、掘之、賊合圍三月、
竟弗能拔。會帝幸伯耆、諸將克六波羅、賊皆解圍而去。建武元年、以功授
檢非違使、左衛門尉、兼河內守。建武二年、詔拒足利尊氏于淡川、新田義貞
當尊氏海軍、正成當直義陸軍。陸軍稱五十萬、正成以兵七百進、且敵陣幾
獲直義、尊氏乃分兵來援、斷我軍後。正成與弟正季血戰十六合、士卒殲
盡、乃走入民屋、坐釋鎧、身被十二創。顧謂正季曰、死而何為、曰、願七生人間、以
殺國賊。正成莞爾曰、是吾心也。與之皮刺死。殘兵悉殉之。帝追悼不已、贈
正三位左近衛中將。明治五年、青詔建祠于正成戰死之地。御筆題曰、正
靈以鎮之、列別格官幣社。
門杉某、稱平次、以善泣為稱。正成所收養、及足利尊氏入京師、正成以五
百騎軍于紀林、擊平賊將上杉憲顯、足利高經等、走之。而新田義貞亦與
尊氏戰、敗之。日暮、義貞欲留陣京中、正成教義貞退陣阪本。尊氏乃
收諸軍復入京師。且日正成命平次與僧教人、歷檢戰場、為索屍狀。

賊兵怪問其故平次輒泣曰昨日之戰新田北畠椿等七將皆沒將獲遺骸
葬之也尊氏大喜曰彼戰勝而退有以也乃索屍首似義貞正成者梟之
急分其兵出要擊在者不復設備正成乃與諸將合兵夜斃味爽
直薄尊氏營放火掩擊賊軍大潰尊氏竟西走

本山雅久大進大輔と稱を刺して領地を奪ひ肥後高田郡本山の城を
併殺と名くを僧侶色併殺の事と山登と名くを併殺と名くを併殺
まことなりと云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
やんごらうと云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
善く曰法雲を殺して領地を奪ひ肥後高田郡本山の城を併殺と名くを併殺
領地を奪ひ肥後高田郡本山の城を併殺と名くを併殺と名くを併殺と名く
曰んくうと云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
たりと云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
世人稱して神帝の領地と云

柳山夫人の廿年輩を論して泣く文と源清義後の事より文に依りて
又人少く探むし地にて御りかゝるまじりくを聞えとあり夫人のたゞ
一し給ふ事と云のり
温惟火のそんかゝるまじりくを聞えとあり夫人のたゞ
良を並ぶるまじりくを聞えとあり夫人のたゞ
恭おつ事と云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
候何事と云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
讓おつ事と云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
統治の事と云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
治まらぬが事と云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
松山治り降伏せし事と云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
候氣と云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり
と格頭と云のりまことと云のりまことと云のりまことと云のり

高し智略を弟に倣ひ一足尾に志操と定せり一日此女と得たりゆり
能く胸中を能く活動する處して故為の世を傷けし名を竹島よき言ふ日自を
多く功勲を奏する人何業生たるも何と能く獲て人の稱をせし得ん
と云ふを人よりたゞ兵革の憂洪水霰雷の患たり人々貧困疾病頻滞
つて辛酸苦楚の厄一こは倭寇逆若くは兵と云ふ皆造物の人世たる
處核抗悔疾と云ふ世と云ふ令く人川の業解かりと云ふ其れに
と為りしを能く運りし能く之を處する得夫と能く考へて中
先を以て迷苦の燃金なる世の如く傲る一世界に此の如く
を希望せりこゝの言此の如く云ふ其れを以て一此の如く
林人河原舟の天福かひかたり
東京 齋 山 陣

目録

三の男道新車馬迅雷振 目録 小津遠五國人 坊田岳陽
波乃ぬ津せしと云ふはありてたゞ一見の如くは一尋

東京略記

東京の元は江戸也 或は江戸東 武蔵野を隔て京師の之部と云ふ
小津宇奈余東尾二里六町東京の之部と云ふ
汝野と云ふ墨田川其處を流す大正八年庚寅上流河原の流所
から明治元年戊辰風聲東幸つて後と東京と云ふ域内と云ふ
多し七ヶ町を置く 世を第何月と云ふ第何町と云ふ
其れを以て第何町と云ふ第何町と云ふ
其れを以て第何町と云ふ第何町と云ふ
二百八十四戸人口五十九万五千九百
零五人明治七年ノ調査ナリ

人力車

明治三年の春初より又輛の車と製造する共けり目録 駢列
人力車と云ふけ招牌をせり當時人車と云ふは汽を以て
して動くもの事と云ふとせは備後と云ふ方今のおく麻草と云ふ
より古馬と云ふ間にて汽を以て動かすは汽を以て動かすは汽
車故と云ふ道路管線の兵隊ありてより車故と云ふ世の元化也

迷うからうして、前より日と暮昌一十年を分る、方回子、武百轉の
増殖、方今の其教陪、獲ふ、乙、徴申、一、道の、肩書、を、た、る、り、

電信機

明治二年正月始りて東京、小坂原と、役、造、下、成、り、り、其、後、四、洋、下、株
五、電、信、機、法、九、列、島、橋、と、海、底、の、電、線、造、揚、の、事、を、請、ひ、り、洋、可
つ、て、明、治、二、年、十、月、其、線、を、橋、造、せ、り、為、ら、東、京、小、坂、原、と、電、信、機、法、の、役、造、の
布、置、の、り、り、西、洋、小、坂、原、と、率、時、せ、り、電、信、機、法、の、上、海、と、日、本、と、電、信、機、法、
軍、海、底、を、三、三、二、一、ト、我、り、付、の、百、字、の、二、一、ト、此、間、の、事、一、又、同、年、英、國
倫敦、と、入、り、五、八、百、金、也、の、海、底、機、法、十、七、金、也、が、り、り、一、時、の、り、り、地、底、を、
得、り、た、り、り、六、六、金、也、英、國、倫敦、と、六、六、金、也、の、事、を、僅、二、百、金、也、に、り、り、
と、り、り、り、り、其、後、橋、造、妙、術、へ、り、明、治、二、年、正月、と、古、國、海、底、の、二、馬、と、連、續
同、年、正月、と、前、京、と、の、間、に、其、後、造、り、り、其、後、造、り、り、其、後、造、り、り、
七、年、は、定、規、の、機、法、を、海、底、の、海、底、と、大、く、電、信、機、法、の、功、を、造、り、り、

明治二年正月始りて、東京、小坂原と、役、造、下、成、り、り、其、後、四、洋、下、株
五、電、信、機、法、九、列、島、橋、と、海、底、の、電、線、造、揚、の、事、を、請、ひ、り、洋、可
つ、て、明、治、二、年、十、月、其、線、を、橋、造、せ、り、為、ら、東、京、小、坂、原、と、電、信、機、法、の、役、造、の
布、置、の、り、り、西、洋、小、坂、原、と、率、時、せ、り、電、信、機、法、の、上、海、と、日、本、と、電、信、機、法、
軍、海、底、を、三、三、二、一、ト、我、り、付、の、百、字、の、二、一、ト、此、間、の、事、一、又、同、年、英、國
倫敦、と、入、り、五、八、百、金、也、の、海、底、機、法、十、七、金、也、が、り、り、一、時、の、り、り、地、底、を、
得、り、た、り、り、六、六、金、也、英、國、倫敦、と、六、六、金、也、の、事、を、僅、二、百、金、也、に、り、り、
と、り、り、り、り、其、後、橋、造、妙、術、へ、り、明、治、二、年、正月、と、古、國、海、底、の、二、馬、と、連、續
同、年、正月、と、前、京、と、の、間、に、其、後、造、り、り、其、後、造、り、り、其、後、造、り、り、
七、年、は、定、規、の、機、法、を、海、底、の、海、底、と、大、く、電、信、機、法、の、功、を、造、り、り、

郵便

明治二年正月始りて、東京、小坂原と、役、造、下、成、り、り、其、後、四、洋、下、株
五、電、信、機、法、九、列、島、橋、と、海、底、の、電、線、造、揚、の、事、を、請、ひ、り、洋、可
つ、て、明、治、二、年、十、月、其、線、を、橋、造、せ、り、為、ら、東、京、小、坂、原、と、電、信、機、法、の、役、造、の
布、置、の、り、り、西、洋、小、坂、原、と、率、時、せ、り、電、信、機、法、の、上、海、と、日、本、と、電、信、機、法、
軍、海、底、を、三、三、二、一、ト、我、り、付、の、百、字、の、二、一、ト、此、間、の、事、一、又、同、年、英、國
倫敦、と、入、り、五、八、百、金、也、の、海、底、機、法、十、七、金、也、が、り、り、一、時、の、り、り、地、底、を、
得、り、た、り、り、六、六、金、也、英、國、倫敦、と、六、六、金、也、の、事、を、僅、二、百、金、也、に、り、り、
と、り、り、り、り、其、後、橋、造、妙、術、へ、り、明、治、二、年、正月、と、古、國、海、底、の、二、馬、と、連、續
同、年、正月、と、前、京、と、の、間、に、其、後、造、り、り、其、後、造、り、り、其、後、造、り、り、
七、年、は、定、規、の、機、法、を、海、底、の、海、底、と、大、く、電、信、機、法、の、功、を、造、り、り、

火船

東、京、と、大、島、海、底、と、又、日、本、海、底、と、布、帆、一、片、懸、結、と、破、破、甚、也、万、里、海、
新、大、橋、と、此、の、京、
風、神、又、は、此、の、波、神、并、況、
此、の、大、橋、只、在、人、間、の、長、嶺、高、今、難、得、歎、
此、の、大、橋、只、在、人、間、の、長、嶺、高、今、難、得、歎、

山はあまのこねのりいほありおのこまのりいほの系

楠公社

酒井邸より内膳身立月造等平の社傳を湊川に定む事祀具中朝
勤王の法體を合為せり其祀位左の如し

本

大楠公附 中山愛親公

名和長平

楠母 同侍従公

菊池武光

殿

小楠公社 姉小路公

兒島高德

源義公

齋藤監物

源烈公

梅田源次郎

具外塚下義徒

高山正之

藤田東湖

藤森大雅

藤本鐵石

蒲生秀實

武田耕雲齋

三島三郎

松本謙三郎

林子平

吉田矩方

平野治郎

大和義舉

會澤正志

大橋正順

頼三樹三郎

櫻田忠元

大平山殉死徒

友國橋

水簾彩霞曉色清橋花一把新橋物清心烟齋露菜露中花露每箇

流是れもやの存はうかど速かふいとぬ橋なり 蜀山人

画舫葦中湧解歌人言今日是周河太平樂事君酒池十室帝是漢葦葦 天山

海軍橋

撤却高門塙板橋化石梁万祀通及眼奇巧耀邦光 岳陽

柳橋

夏し路傍條草長多細腰弦歌動烟月即色新橋 岳陽

柳原封壇

楊柳隈色揚柳春ふ枝更教拂紅塵清看鳥合綠色鏡映青雲馬馬 繪

新世橋

萬教の非なる人の力よかて動ぬ新世の橋 下決保躬

まの心を多むくまわくもいも橋もまの心を多むくまわくもいも橋も 一翁

豊原山跡

田舎の川の内へ首尾此豊原山跡と云ふ古田邊灌の跡
残る不盡原跡と云ふ海ありく軍より古跡を此跡と云ふ

駿河街三井

美石峰橋臺も室宅尾兩棟対如田岳瑞雪思入事

増寺 或人焼畠を証する事

跡をたゞ之村の地代焼畠と云ふ好む事ありて云々

新橋漁車待合所

鐵道六明治五年正月上り橋原ノ新橋迄の川合々後藤より昔置業式
を押し行はせり

火船決津祖祝通暮るべし一同在東京自津法陽以道里均平天中

橋原公と云ふ龍の雲を降してけふ云々一八事ありき

明治七年七月十八日一週日川東京橋原漁車の高者信計云々

之の山寺実世車賃七文百十七文二十七銭積石賃五百文拾九文二十七銭
橋原公の首を千六千五文あり

新在東京

く一京の地代登りふたりふたりを好むと云ふし傾城の古蹟 古蹟を待

桃桜跡急棟業買塔の亂花首首南吉別室長有精能一様守之流勢(瑞大柳)

隅田川

次々隅田川の橋をさそせたり くらげのくもれさすも

隅田川橋かきして清流の言ふはあはれせくはくらん 小次保躬

本町寺梅原塚

是頃ハ東後より一天皇京少て東敵しくふらに昔ハ梅原寺と云ふくが
慶長二年近來年自信尹云ふ初め下向の時隅田川を道原の川より
之より年々よりなりてふらに寺僧と信ふ本町寺よりなりと云ふ
ふらに寺は分一ハ 梅原寺は梅原境内より塚の山より行て梅原に
付て發と云ふ

雲とあふ山王権現とん 梅の山王権現此は現すと例年二月十日の夜
左田中將惟房の次子五郎一と云ふは七歳の時其山の日掛りて大いにおぼあせり國家の
 松の丸し目と名と争ひ其夜とて其時梅の花の落りて山をさして山王の山なるらん
 ともいひく大佛の御よりん此の信美藤をといひていふもいふもいふもいふもいふもいふも
 をををのりていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 まうぬしはの信美藤をいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

押出の實深君と大徳上人の御まじり 次
此の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 惟何出の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

米阿羅漢 湯田川の花 次
此の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 惟何出の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

湯田川の花 次
此の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 惟何出の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

花氣如烟 次
此の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 惟何出の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

春松 次
此の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 惟何出の御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 御まじりとはいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

詩をたふすしては兩雅流の一巻を博と

盤石白雲潭見之礼地春第高宇停年思在四吳高終遠所未飲魂欲醉
築廬五里以盤旋足進花奈山深明月出山又素客來設清筵
楚危告不顧軒
楊玄輪與美馳眺風物佳露花又評柳殊出堞窺詩賓主一樽酒後後孔皆
一雨去是窮大隔草林深柳度亭樹簾幙幽多遐迷後度遠山疎月澹曉花
紅塵漲花何處楊柳獨有鈎聲響勝區占上流四顧皆花之中築一亭也
江
名流之會惟在名不燥燭之時其詞章以因之何須後生之稱贊乎

大原松尾の妻かむ子の詩歌

重恭借批

馬後宿心

芳樹女史

春樹聯翩月色微今宵高宿水信し櫻礼に感英行念曉露と
そそ

あゝそそ

かよとそそのあゝそそと知るや山さくら花のそそとそそとあつら

謙信公信州八幡御願文

夫竊奉窺八幡大薩埵之縁記本地毘盧度那尊為衆生濟度
假者 神宮皇宮之胎内于時露我朝帝王父君者奉彌
神武帝故皇宮為懷胎為夷國御退治為先住吉諏訪二神日本國中
大小神悉有供奉奈向西海没三韓果而御歸朝於九州豊前國牧郡
王子御誕生遂顯宇化八幡其以降勸請雍州男山末世今時闢諱兵
革擁護之誓無異他然間累代暫者天下之安危禁裏之事每事以勅使
被美之是非忽神託嚴妙也爰景行帝御宇以往被停直託段有其說之
雖然神慮全無違儀因茲石清水之流分補諸國柳奉視當社地景
南者從祖母捨山之木間田每滿月之影適未三五夜中漸也故月色入新
也北者雖隔數十里崇善光寺如書顯先段八幡宮者無量壽佛之為
垂迹故也其薰田畠渺々惠諸民觀世音大慈大悲之誓願無疑遠有
十方億土亦與謂之半東者千曲之流水洗社邊之岸惟半可謂

放生河、西者、滿湘之初景、山市清嵐、不斷颯々吹布、而自除神前之塵、
神木茂、雙烈枝梢、定如深山、而天然殊勝之靈地也、庶人勿云不奉崇、
之先年、以未當口進、祭奇特之瑞想之糸、信仰不斜、異國本朝古未、
武勇之輩、我天子并將軍家、勵大忠切、賜之分國款、由國款、
此兩糸於本意之緣者、無據、今武田晴信者、貪無厭、於他方國、刺始、
戶隱、飯繩、小菅、三山、善光寺、其外在之所、坊舍、供僧、爲斷絕、寺社、
領欠落、故御供燈明以下、怠轉、光塔佛閣、伽藍、無際、限燒却、加之京、
家本家山門、領寺押妨、令眩亂、萬人道俗、男女悲歎、紅淚、其滴噫、
不異恒河、誠哉、從巡、謁事起、謂之款、其上晴信者、齡及八十、老父、追、
放甲國、無爲方、而不顧、恥辱、迷步、洛中、洛外、前代未聞之分野、奉、
對天下、非逆心之人而已、佛法之款、王法之怨、結句不孝之族、禽獸、
猶有親子之禮、況人倫乎、如斯重科之糸、不足揚手、算然而天罰、
于今、遲々無算、未但期其身、時刻到來、所歎、總、體、輝、虎、事、曾、

而非此國競望、假令依爲隣、外小笠原村上井上高梨皆是累、
代申、訟首尾、非可默、彼面々可披本意一儀、迄也、順弓與逆、
矢、神助定而不可有枉曲、既神不享非禮云々、所詮今般凶、
徒無殘、誅伐如存、分於達本意者、課此國味方中、本社講、
尋經藏末社、鳥居如之、速加修造、別而一所奉寄附、願此願、
文武、輝、長、久、子、孫、繁、榮、弥、揚、心、於、雲、上、振、譽、於、天、下、仍、願、
書之、趣、如、件、

永祿七年八月朔

藤原輝虎

明治十二年己卯八月

雜集

明治十二年乙卯八月廿日

今午下年氣付積典内柳原愛子分晩守子湯後從子極に世に

命をなす

自^{ハルニヤ}家名^{ハルニヤ}前^{ハルニヤ}仁^{ハルニヤ}と命^{ハルニヤ}市^{ハルニヤ}也^{ハルニヤ} 明^{ハルニヤ}室^{ハルニヤ}と祿^{ハルニヤ}も^{ハルニヤ}今^{ハルニヤ}午^{ハルニヤ}世^{ハルニヤ}命^{ハルニヤ}を^{ハルニヤ}な^{ハルニヤ}す

奔^{ハルニヤ}向^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}る^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}ふ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}れ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}ふ^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}い^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}近^{ハルニヤ}せ^{ハルニヤ}た^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}ふ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}は^{ハルニヤ}別^{ハルニヤ}が^{ハルニヤ}由^{ハルニヤ}来^{ハルニヤ}

ま^{ハルニヤ}ん^{ハルニヤ}ま^{ハルニヤ}ま^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}世^{ハルニヤ}に^{ハルニヤ}な^{ハルニヤ}る^{ハルニヤ}其^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}中^{ハルニヤ}又^{ハルニヤ}一^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}う^{ハルニヤ}や^{ハルニヤ}唯^{ハルニヤ}行^{ハルニヤ}事^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}月^{ハルニヤ}一^{ハルニヤ}夜^{ハルニヤ}

と^{ハルニヤ}云^{ハルニヤ}ふ^{ハルニヤ}か^{ハルニヤ}句^{ハルニヤ}甲^{ハルニヤ}子^{ハルニヤ}万^{ハルニヤ}半^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}遠^{ハルニヤ}美^{ハルニヤ}変^{ハルニヤ}革^{ハルニヤ}が^{ハルニヤ}流^{ハルニヤ}り^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}感^{ハルニヤ}冷^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}は^{ハルニヤ}集^{ハルニヤ}ま^{ハルニヤ}り

実^{ハルニヤ}一^{ハルニヤ}表^{ハルニヤ}七^{ハルニヤ}月^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}情^{ハルニヤ}差^{ハルニヤ}り^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}人^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}身^{ハルニヤ}は^{ハルニヤ}ま^{ハルニヤ}ま^{ハルニヤ}り^{ハルニヤ}は^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}輝^{ハルニヤ}き^{ハルニヤ}こ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}村^{ハルニヤ}邊^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら

易^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}考^{ハルニヤ}て^{ハルニヤ}急^{ハルニヤ}う^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}悔^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}多^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}丸^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}遠^{ハルニヤ}な^{ハルニヤ}身^{ハルニヤ}体^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}終^{ハルニヤ}り^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}心^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら

相^{ハルニヤ}ひ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}う^{ハルニヤ}や^{ハルニヤ}ま^{ハルニヤ}遠^{ハルニヤ}き^{ハルニヤ}を^{ハルニヤ}入^{ハルニヤ}原^{ハルニヤ}が^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}激^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}言^{ハルニヤ}ふ^{ハルニヤ}も^{ハルニヤ}世^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}何^{ハルニヤ}を^{ハルニヤ}ゆ^{ハルニヤ}ら

花^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}き^{ハルニヤ}ま^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}世^{ハルニヤ}を^{ハルニヤ}輝^{ハルニヤ}り^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}又^{ハルニヤ}世^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}中^{ハルニヤ}に^{ハルニヤ}変^{ハルニヤ}革^{ハルニヤ}も^{ハルニヤ}有^{ハルニヤ}り^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}は^{ハルニヤ}此^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}情^{ハルニヤ}差^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}の

ゆ^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}又^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}は^{ハルニヤ}驚^{ハルニヤ}き^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}う^{ハルニヤ}流^{ハルニヤ}れ^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}う^{ハルニヤ}人^{ハルニヤ}を^{ハルニヤ}救^{ハルニヤ}ふ^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}人^{ハルニヤ}を^{ハルニヤ}救^{ハルニヤ}ふ^{ハルニヤ}言^{ハルニヤ}ふ^{ハルニヤ}

他^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}と^{ハルニヤ}し^{ハルニヤ}人^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}は^{ハルニヤ}此^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}情^{ハルニヤ}差^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}下^{ハルニヤ}夜^{ハルニヤ}極^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}た^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}う^{ハルニヤ}又^{ハルニヤ}あ^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}は^{ハルニヤ}此^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}情^{ハルニヤ}差^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}の^{ハルニヤ}下^{ハルニヤ}夜^{ハルニヤ}極^{ハルニヤ}く^{ハルニヤ}た^{ハルニヤ}ら^{ハルニヤ}う^{ハルニヤ}

うら山御方し月と輝く松坊若れせよせよぬ用心とく丸く愛せなごたよ
せわな成るあうらしえくうく月とまて油のよとけは魚のふまのたう
の事し時日下夜に遊してえうと命せし 竹藪不人

皇よれせまう冷ひそろと祝奉るく極たまへる歌を

うらうくと出る朝日れやうよてうさし氣のまくとあつらふ 三原重雄

かこてし君得まうけう得まうけうこよ坂のわつ天つ貝れみよ 後羽次静

はぶくと春れまよに採るらんさそへ白く朝日このうけ 三原三風

銀し金七玉しにせんよまもまもめしにいあへいといきん外う言のまに

うよとあうけり日のみこのあまはすすめよらさ人のうらとさくんとて

よも津倉と撰ひまうして天地の動ぬかして日と月の愛くぬ

如も免國れよれゆいつをききせよまの宮としこくわきてあふ

せほくのゆ命令とあめとたうとくゆふもひの地よあえつて山に東

えふちの母よたかくあつてあるは澄月かうて草と木とあつて

靡く山川しうりてはう若う代の光をそめて新代しの代しよ
せとこつて我こもよ出ていんまよわきつて 池原香輝

及歌

歩稜威をいけうの窓のまつこたうあふはせとこをわきまらう

出さう歌居

或る行田舎の腰形とこのうらおきまおきまの歌よと集うて世歌を
かんとのうら林うけう野田の林かこえ歌好との人あまの村せんとて
まうとまれとあ林の母かう痛きんかしくうとそと撰やうぬ又と
錢が刺せんそと倒れ難まがひらぬ歌の河をながあがまうれをまのまな

新しきうや

一巻

左勝

鳥子の後歌

あたるか大空のこねじんしとまの海評いうまうとやえん

右

南海の風波

舟上南此沖の港泊して是方の風をうけ防らん
判者曰右の歌其心もさうなるすたの詞もよく一はし君を後
國と對しついでさすはあつて一も勝て定む

審 左持

右年端

さきもて遠いあはけいさし米食の好いさや 菊尾好のはら

右

唐列判

かゝる美し併い着くならやまは防く人の力けりりて

判者さうた右も好しうぬこのさう判者いぬ較さうしはま
滑く持くと

二審 左持

狼烟の鞍

まゝさうと足らんくしげぬ美代舞うらやしく心ぞもや

右

グラントひのき

植ちて若うゆきさひのきえー如くよなりぬ柳籠のこ

判者さうた右判者賀の古歌は信も右柳の長とつらふとさう
何とせむ白く舞うらやしく美代心のけく深くさし判者のこ

審 左持

上野の大進物

いささしく今日の大進物さうぬのあさひつこ車ひくし

右

新橋のてこ舞

きりりく関あつたさきか。のさうさやうらりてそく

判者さうた右判者橋をたいて左の女も勝らん

審 左持

大蛇巻の橋

ひさあそふ傍りも若うぬさ二百圓とけておらん

右

雲探訪の奥没

いささかこのあはれとひささし筆代ととあふた

判者さうた右判者味くたうの舞う可栄く遊遊し使はぬ笑ひさ

はきよのたけのほをいさしきし事ハ難きことなり
赤山前大匠領ノクラント君ハ海舟せしむり也長尾はたかく回春其
也の比念と表せんとも縣令の請ひよりうり回春はあま一人が返防の
公園内ノ松樹とて植せしむ又此事を標名とす此文を記して
縣令の傍に記し置りて是と名を別して木の傍に建んとしこれど
ゆふの事しきふ彫刻よふ夜なるを以て世に縣令より下副高へ紀
せしむ其由を抄寫せしむりてはくその釋文ハ

縣令内海尾勝兵衛の需人遊々余室を以て其の樹木一株を
長尾公園内ノ栽植せしむ希くハ双樹勢を成長し永遠の壽を
俾らばく日本の將來を表せん事と

純之ハ言七條中一月亦二日日本長尾はたかく
ユ一エスグレラント誌

江別坂本なる坐川に於て西元天守九年の大原の城を新立

駿河守兄雅齋東園ノ唐松の志哉つぎと青蓮院の文尊綱
法親王のよりとびて書せ居り記の終り

唐松記

叡山の事またせあまうりこのかた退將より其の精舎佛窟の跡
し麻のやうとくかり時つたいの道なきとろけり埋れとく
少みわくたうしなうりしとがこき世の湯かたりの令り
らり山門再興の事なり顯密のあまし目く年々もやまこ
りてふかたの目くりの急獲し昔の程なきをなけれかたの標よとこ
なうされ志賀幸徳の神雲の湯祀となり湯供たりとなく奉り
管絃のしの音ききき波松風たかくていとまかむしけり
きうとこのまいつとやの大風たふまてかたよりしものこらす標
ハ神筆ハ神威と事たえぬやうと世の事とてあけりまふ新法懸望
也れとて文書すすくれ常しかのつらそなけりしうりありとて

出大洋の海城郭をありけりたまらば、其もかりは、松鹿
東國、難斎王者として、二つ、このあひれ、ち見ゆ、あひそ、
波まの、のり、く、く、や、て、難斎、で、載、も、や、と、も、平、の、も、れ、
し、く、月、情、つ、る、ま、と、し、と、て、枕、く、れ、り、又、持、り、い、り、ま、り、
け、ん、く、い、は、ま、い、ま、の、人、と、目、と、ち、め、ち、ま、り、す、く、な、り、
天正十九年卯年秋のすゑ、入しぬ、さ、と、う、く、し、
中、よ、り、
とき、こ、ゆ、ね、た、い、や、う、し、た、く、あ、ひ、つ、ま、て、春、か、く、ぬ、
又、つ、人、妻、の、も、他、と、お、ほ、む、ね、と、く、こ、その、あ、み、
世、帯、と、う、や、ま、そ、か、り、て、大、津、の、定、古、
彼、津、川、の、出、れ、と、て、法、水、の、伝、ま、
馬、や、つ、ら、と、も、天、を、
又、つ、人、妻、の、も、他、と、お、ほ、む、ね、と、く、こ、その、あ、み、大、津、定、
世、帯、と、う、や、ま、そ、か、り、て、大、津、の、定、古、
彼、津、川、の、出、れ、と、て、法、水、の、伝、ま、
馬、や、つ、ら、と、も、天、を、

事、さ、り、事、を、ち、り、
有、神、祕、不、載、
ち、ま、り、
と、し、え、え、と、
か、り、
い、く、
よ、の、
上、と、あ、り、
さ、く、
十、時、天、正、
皇、后、
か、く、

ふたまた世を後の世とくふりきやの大風を倒してかへさうしのです
とちうしほら其れしよのくも既ち枯れし一はりしとき神あふり
休らうりて逍遙此世を渡らん

花のきくたれしあつをこみ松れあてひきききみとらんとあはよ

と神たまひては雲ふけりてさへあつてひげの春ふたりよき
ふとせやう老木もまほしの此風を倒してさうとあつてはさへし
たえぬまうふいあへうそわかればさう又ふきを裁侍らむと思ふこと
年なりまよふのかみ並れ初春ふかんとすつかきふかへてふたひ風
つら松をこころを裁よと〇〇りけし年をさる里へふさうなりゆき
人ふらうちふけかきふかきさいだみてさふしして植まやと明くれ
さすりこころなりかしてこりかの家等ふかばせしことさ風情をたま
ととちよ進し一かし目をほそともしちたつねのふかへしはさう
あつたは貴の社とてさうよき松をぬきぬきとさよふんしと

あやしくはかきかきさうなりあつてさうかへるまじらひてさうさ
まひむしむしほらとあせしと又人をせしては貴の社ふかたやあふん
とちうかひよやうさふかや夜志沙の貴の社とて松をぬきぬきとさ
のふと率てさうさうはかきまをぬふしとさうさうかきふかあや
のさうな世のまふしとさうのさうをたひさしとさうをさうさ
て、たうかりさみいよ、神意のねをさくさへてぬかんとさ
むらりしとさ馬の鞍うらて松をぬきてさうとて松一さうさうりつ
う人侍とさうさ希代の勝事とさうさうされとさうさうさ
まらふかかりき其わうとさうさうさうさうさうさうさうさ
のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
きさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
ふほさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

彼石の善人化してなり世の傳人なりく思ふよのわらうのわらうのわらう
言明大王の松林社をもちよむる一巻とて一巻とて一巻とて一巻とてのあやしく
くすまき事きとていふよのわらうのわらうのわらう

十時正平亦年 壬辰三月

雜齋 直壽齋

後醍醐帝の宸翰言明王の託辭命の異言をいふ事極く浩まおほく
且脱文ふやとて思ふ道前とて女くわしせしむのこころの書か
る事よあはれぬ其まをて裁とたは半づのわらうのわらう

或人の分り まつりぬ風とらけぬ柳のう

海らほらとて横橋のゆみり事をわらうる思ふ事とてわらう
晴安芳若り方々をわらうはせしむの回會を待て移居とて
たまはる附入被こと

口は色鴉の川枝よりしりしむる口被りしむるくくくくくくくくくく
何れのはとてしりしむるくくくくくくくくくくくくくくくくくく
幸留くわらうり常なきは凡ふ法施の菓はのゆあま初秋とて命を授け
刀の親古くくくく知勇まをて深平たりし名將の退去は存其の擧
となり高法のはは利枝の太いなるを片はわて結をまじしむるは
災患一人はし食いぬるは放馬のふ徳妻はハ色盗賊の親おれ妻は
毛は使をぬるは幼後に出せの口急情の妻顔の小に大門はハ狂意ま
靴の只は官途のく盛んて全にの良友ハ志成をまじ大にの靴さんとの
能く人の頭を解く花よりはきり口没帯に其れねの支女ハ志成と
ほきりきんで爪はわらうのわらうはししきよらまらぬ一件とて法を
世名のはくをなわて能く吾利つき其言をまけたまらぬ其進成ひハ
幸福をうんととまらぬ法はししと結とてけい外猶故のカラコと通らぬと
んらまししおはがわつとてんらわい

奉祝東巡

弘前公立 小学教員 清水滴石

伏々惟レハ神聖文武皇帝陛下、列聖ノ正緒ヲ承ケ、中興ノ大業ヲ
開キ、徳ハ三五ヲ兼テ、恩ハ禽獸ニ及ブ、人ヲ用ル惟順、既ニ明地ヲ
磨ス、俊女官ニアリ、庶績咸熙、馬車ノ轡、ハメルモノハ國歩ノ
進ムヲ明ラカニスル也、電信ノ忽ク、タル者ハ人智ノ開クニ表スル也、
讀書ノ聲ハ三戸ノ村ニ起リ、開化ノ士ハ十室ノ邑ニ出ツ、山ハ諸嶺ヲ
開キ、海ハ巨船ヲ繫ク、製造ノ局、熾然トシ、高ク聳ク、濟生ノ院、與
焉トシテ、互ニ輝ク、人ニハ自ラノ權アリ、物ニハ塵抑ノ弊ナシ、金貨ノ
腰ニ重キヲ嫌ヒ、楮幣ノ懷ニ輕キヲ貴フ、佩刀ニ換ルニ忠信ヲ以テス、
澗袖ヲ解キテ、便衣ヲ穿ツ、此豈明治ノ極功ニアラスヤ、聖上臣ヲ
視ル、未タ治ラサルカ如ク、敢テ九重ノ深キニ安ンセス、人ノ四裔ノ遠キ
ヲ巡視ス、往年鎮西、今茲奥東、孝子ノ閭ニ表シ、忠臣ノ墓ヲ封シ、
功勞ヲ獎勵ス、耆老ヲ慰藉シ、時雨ノ降ルカ如ク、歡聲洋ク、タリ、

柳モ青森ノ地タル、北ハ松前ヲ控キ、南ハ羽川ニ接シ、山河清秀、田野
肥沃、所謂天府、實ニ北門ノ鎖鑰ナリ、而テ率土ニ僻在スルヲ以テヤ、
紀元以來二千五百余年ニシテ、始テ斯盛ヲ逢フ、衆庶ノ喜ニ何事
カ之如ク、微臣豈高呼華祝ニ、傲ヒ雀躍、鼓舞ニ止ニヤ、因テ聊カ
蕪詞ヲ綴リ、謹テ奉祝ス、誠恐誠懼、百拜、

雨歛輕塵、馳道淨、家々日旆、閃風斜、巖城幸代、萬人喜、
高展翠眉、迎鳳車、

左ノ流、右ノ流、御氣、春ののち、
柳ノ下、宴會、右大臣の御洗、春ののちの柳、多の柳、多の柳、多の柳、
本宮、御氣、右大臣の御洗、春ののちの柳、多の柳、多の柳、多の柳、
流、御氣、右大臣の御洗、春ののちの柳、多の柳、多の柳、多の柳、
編、御氣、右大臣の御洗、春ののちの柳、多の柳、多の柳、多の柳、
乃七、祝の奇、を乞、く、候、と、り、ら、

石上女 ことこの花をけあさく姫抱の音とて流し世と春とあつらん

夜付鳥哉 ぬと玉のやまゆらりの根は火の薪しこりかきやけりな

とらみていたらうらむかへていと悲しあ入り 又よめ安達のこころをけりな

皇位を遊遊年女といふむかへたりし昔かしくしや哥謡をよみ右大臣

かここのあまうみあやむむして親族朋友八十餘人同室の寝をいしむるに

史を一刀の屏風よけりみかきの女をよ用ひしとさうしりてこし

皇位少欲 老雲のうけぬけしすむたつたつたをせと懐ふおろろしん

ふ代よはふたうやさきかこしは雲井よかたりををさうしん 右大臣

友藤のうらむしなほさ雲井よりふ代よふたりと風をさうしん 柳菟病友

久方の雲井はふたうらむしつのお代よしとるさんしん 吉徳正風

礼賢茶を舞花は清老幹法雲松傍よりあ古風を流る作の親の孤三郎

此雲高 皇位三年皇社願堂 彦島為美 明徳五年四月廿九日

ふ殿座云言年の 皇位三年四月廿九日 社願堂 彦島為美 明徳五年四月廿九日

埼玉縣下を流る藤波重好の歌詠

一月一日代あり ねらふ去年さしとて今年一ねたりねらふ去年のさしとて今年

美葉集并云山上悦良の歌詠

銀いふる福とておとせせんよまささうたりしあふさあやし

明徳五年一月廿九日歌詠皇位少欲

御心庭上御別

清製 なまけりていそりてはたかりたりあふさそのさよさしはる

皇位 ねらふ去年さしとて今年一ねたりねらふ去年のさしとて今年

九そけみあつたりは去年のさしとて今年一ねたりねらふ去年のさしとて今年

あつたのさしとて今年一ねたりねらふ去年のさしとて今年一ねたりねらふ去年の

なまけりていそりてはたかりたりあふさそのさよさしはる

皇位 ねらふ去年さしとて今年一ねたりねらふ去年のさしとて今年

期日けれりよ白くはるのあふさあやし

皇位 ねらふ去年さしとて今年一ねたりねらふ去年のさしとて今年

ちりしきとていふ九重にこれかへて田舎より一歩

音尚早か化
言信の風

久方れせらの在りてなきていれしかゝりてはるの毛よりし

三位世平
安藤

九重の女をばよたまて昔田舎にたゆむよと世よりなり

三位小倉
長子

久方の雲井れをよすしはつらなりとまじりしをけりなり

信長子
長子

高き木井れはまの種をよん空をよて赤坂と名ふあまの胡り乾

世判を久日かけ日向ふま赤根をす日のたをよ大津谷の輝くまよま

久方の天光をよし沙好ははくまるとあけの地より居て大をよい遠

いしとわりあき庭より尾羽をかきて唐むらを打掃ひつ々をよまらふ

たるとみせかきせりいんまふ頂の赤子のまらふをよまらふ赤くけり

ほろろとくしうりて信あり赤坂の大を新あやまきとく

あせよとまのなほは風かかむとまらふありつらなる

ひらむのよとまのそまのよふたがまらふよふたをあらう

のとらからまのなほありけりあをへぬまあらう

賛志
江口信在堂
玄深

はらむれりのあまのたをよとせとかなつるれ毛よりし法師

江口信在
光昭

あせよとまをまきとまらふん世井のを代徳の毛よりし謙頃

江口信在
為来

たそのはらむとまらふしつるのなほつらとまらふやたがとらふ

江口信在
ら

内国との書をよまのわらうとまらふ天の田舎よりし

江口信在
利登

大をよまらふとまらふしつるのなほつらとまらふやたがとらふ

江口信在
伊東流介下

去凡の書しはまらふとまらふのなほつらとまらふやたがとらふ

江口信在
貞子

大をよまらふとまらふしつるのなほつらとまらふやたがとらふ

江口信在
資之

あせよとまらふとまらふしつるのなほつらとまらふやたがとらふ

江口信在
忠水

あせよとまらふとまらふしつるのなほつらとまらふやたがとらふ

江口信在
鳥根器士
仙田吉三

右の書は信長

この書は信長の子の証をよりて歌の中と二三句或はちを寄贈し出く

赤坂は信長にふかしく年よりして安共あらうたの人代も空の歌をよりて

たると又信長の歌も信長は信長は信長は信長は信長は信長は信長は信長

言畢各淚如雨。遂與妻子相別。開扉而還。夫人携兒前至浦添而居焉。
兒名尊敦。

○邵遠平續弘簡錄分注案。琉球上世無考。據其世續圖云。宋淳熙

十四年舜天即王位。舜天為朝公之男子。未詳何許人。其不祧祖也。

吾曹案スルニ世續圖ハ最先ニ支那ニ舶載セル琉球ノ史來ナリ此時琉
人ハ支那ニ對シ為朝ノ日本人タルヲ隱諱シ未詳何許人ト云ヘリナリ
然ルニ為朝日本人タルヲ諱ムモ亦舜天ノ為朝ノ子タルヲ諱ムト能ハ
カレハ益シ其實ヲ徵スルニ足ル

○大清文獻通考相傳。自天孫氏始建國。傳二十五代。逆臣利勇弑而
自立。浦添按司舜天者。日本人皇後裔。討殺利勇。衆推為王。

遂代天孫氏。時宋淳熙十三年也。又曰舜天依日本書制。字母
制四十七名。依魯花。琉球有字自此始。今得中國書多用鉤挑

旁記。逐句倒讀。實事居上。虛字倒下逆讀。文移中參用中國

一二字。上下皆國字。猶存舜天遺制。

○徐葆光中山傳信錄舜天。日本人皇後裔。大里按司朝公男子也。

淳熙七庚子。年十五。屢有奇徵。長為浦添按司。人奉其政。斷獄不
違。天孫氏二十五世。政衰。逆臣利勇特羅執權。鳩其君而自立。

舜天討之。利勇死。諸按司推奉^前位。○又云琉球字母四十七名。
伊魯波自舜天為王時始制。

○周煌琉球國志略。舜天。日本人皇裔。大里按司朝公子。為浦添

按司。宋淳熙間。天孫氏逆臣利勇弑君自立。舜天討之。衆推為王。

以上諸書ニ載スル所ヲ以テ之ヲ徵スルニ我ガ保元物語ニ為朝ノ史ヲ紀
スル詳備ナリナルハ當時騷亂相繼ギ海ヲ隔ツル島嶼人ノ相傳ルモノ
ナキニ由ル而シテ琉球ノ其祖先ノ事ヲ紀スルハ歴トヒテ丹青ノ如シ若シ
文字アリシ以來ノ各國ノ歴史ヲシテ社會ニ信據スヘキモノナラシノハ

琉球ノ史來モ亦當ニ地球上ノ字ヲ讀ムノ人ニ向テ其信據ヲ得ルノ權

利ヲ有スヘキニ夫レ天孫氏ノ時ハ曠ク茫ク存スルガ如ク亡スルガ如ク歴代ノ事蹟皆考フベキナリ然ルニ舜天以後ハ其世次沿革治乱興亡ノ迹一々史冊ノ間ニ明瞭ナル氏ハ此レ其天孫氏ノ時未ク文字アラハス舜天以來ヨリハ用ヒ初メテ紀載スル所アリトハ中山傳信録諸書ノ載スル所口確トシテ信據アリトスルニ此時我國海高蹤ヲ絶テ其後二百余年ニシテ琉球始メテ薩摩ニ通スルヲ得タリ然ラハ則琉球ノ中古ヨリシテ文字アルハ為朝舜天ニ起ルニ非ズシテ將夕何ニ歸セン乎舜天ノ為朝ノ子タルト為朝ノ琉球ニ入ルハ亦何リ疑ハシキ

南島諸島朝貢考

琉球ノ名ハ支那人ノ指名スル所タルト琉球島ハ隋ノ朱寬カ發見スル所タルトニ係ラズ琉球ノ人民ハ隋唐宋元ノ間未ク嘗テ支那ニ服從セズ明史自古不通中國元世祖遣官招諭之不能達一而シテ其ノ我國ニ朝貢スルハ則チ國史ニ概ルニ數金トシテ徵證スヘキ者アリ

推古天皇紀二十四年(隋大業十二年西六百六年)邪久人歸化○南島書ニ隋書ヲ引テ云煬帝遣羽騎尉朱寬招撫琉球琉球不從寬取其布甲而還時倭國使未見之曰此夷邪久國人所由也按彼所書則知其國既通于我曰邪久曰按致東方古音通此云按致隋書以為邪久即是琉球也ト村尾元融力續日本紀考證及沖繩志琉球新誌皆是說ニヨリ

天武天皇紀白鳳十一年七月(唐高宗弘道元年西六百八十三年)多禰人掖玖人阿麻彌人賜祿各有名阿麻彌齊明紀三年ニ海見ニ作ル南島志ニ大島琉球北界國史所謂阿麻彌島或作奄美奄美謂之阿麻美者上世神人之名也其東北有山乃神人所降因名曰阿麻美嶽島亦因得此名地形稍大後稱為大島ト大島ハ即チ世法錄中山傳信録ニ小琉球ト稱シ續文獻通考ニ琉球ノ北山ト稱スル者ニ阿麻美嶽ハ即チ大島ノ湯灣岳阿麻美神ノ夏仍チ島人ノ口碑ニ存スト云

文武天皇三年(唐中宗嗣聖十六年西六百九十九年)多禰夜久奄美度感等

一人從朝寧未貢方物。授位賜祿各有差。奄美ハ即チ阿麻美國音相通スニ
度感ハ今ノ德島亦國音ノ訛ナリ南島志ニ德島舊作度久島國史所謂度
感島ト中山傳信錄ニ度姑譯謂德島亦南島志ト相符セリ

元明天皇和銅七年(唐玄宗開元二年)西七百十四年少初位下太朝臣遠治等
率南島奄美球美等島人五十二人至自南島靈龜元年天皇御太極殿
受朝陸奥出羽蝦夷并南島奄美夜久度感信實球美等未朝各貢
方物信實ハ即チ今ノ八重山島一名石垣南島志ニ石垣入表ニ島之地總稱
以為八重山國史稱信實石垣乃信實之轉耳ト中山傳信錄ニ八重山土音
彛師加紀ト蓋シ信實石垣彛師加紀國音五ニ通スルニ球美即チ米島
南島志亦國音同キニ中山傳信錄ニ姑米山ニ作ル

以上梅スルニ地玖ノ琉球ノ南島志ハ隋書ノ羽騎尉朱實カ獲ル所ノ布甲
ヲハ我國ノ使者見テ以テ邪久國人ノ用ル所ト云ルニ攷シリ吾昔ハ今強テ
其符證ヲ求メス然ルニ阿麻美ノ大島久信實ノ石垣タル球美ノ米島久共

徵憑著明ニシテ何等ノ猜心ヲ以テ之ヲ見ルモ亦疑ヲ容ルヘキニ非ス當時
各島子立未チ相統一セス而シテ國史ハ則チ合セテ之ヲ稱ヒテ南島トセリ
元明紀ノ率南島奄美信實球美等島人至自南島ト謂ヒ及ヒ南島ノ
奄美夜久度感信實球美等未朝ト謂フ即チ其明文ナリ

延喜式ニ攷ルニ南島ハ太宰府ノ管スル所ニ孝謙天皇勝宝六年(唐玄宗天
宝十三載)西七百廿四年二月丙戌勅太宰府去天平七年故大貳從四位小野
朝臣茂遣高橋連牛養於南島樹牌而其牌經年今改朽壞
宜依旧修樹每牌顯著島名并泊船處有水處及去就國行程遙見
島名冷漂著之船知所航向所謂南島ハ即チ前ノ奄美信實球美度感
諸島今ノ大小琉球ニシテ而シテ當時相續テ朝貢シ及ヒ我官轄ト下ニ在ル
事迹國史ニ歷載スル者此ノ如キニ横濱カセツト記者慶雲四年南島人ニ
位ヲ授ケ物ヲ賜フノ夏國史ニ見ユスト云ヘルハ何ノ國歟ヲ指シタルニヤ續日本
紀一本文武紀第五葉ヲ脱スル者アリ記者ノ藏本或ハ脱葉アリテ記者ハ

偶々考照ラ失ヒタルニハ非スヤ是等ハ遠洋人ノ我國ノ書ヲ讀ムニ隔靴ノ嘆ヲ
免シサレニ起ル者ヲ吾曹ハ彼ノ小学教師ノ未熟生徒カ咄暉ヲ謀ル者ヲ
叱責スルノ過嚴ナルニ傲フ事ヲ欲セサレシ

古ノ石印本在也し聞之者馬山馬山彭亨帝女將支那書此
書セシキモノハ今も亦多ク半強ク山石印本在也し遠洋人ノ
山石印本在也し今も亦多ク半強ク山石印本在也し遠洋人ノ
半強ク山石印本在也し今も亦多ク半強ク山石印本在也し遠洋人ノ
此書(四馬山馬山)山石印本在也し今も亦多ク半強ク山石印本在也し遠洋人ノ
臨文ハ茶ノ産地事他自章文在也し今も亦多ク半強ク山石印本在也し遠洋人ノ

学問の解

苟智リテ人ノ之ヲ世ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
以テ善クシテ人ノ之ヲ世ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
也といふ事ハ六カ一ノ文有ルヤハ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ

之ヲ善クシテ人ノ之ヲ世ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
其肺肝を善クシテ人ノ之ヲ世ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
之ヲ善クシテ人ノ之ヲ世ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
先此を悔ハシテ人ノ之ヲ世ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
也といふ事ハ六カ一ノ文有ルヤハ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
也といふ事ハ六カ一ノ文有ルヤハ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
巧ムルハ修ムル事也人ノ之ヲ世ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
自今以後其物とシテ人ノ之ヲ世ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
此ノ事ハ六カ一ノ文有ルヤハ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ人ノ之ヲ善クシテ
臨淵而羨莫不如退而結網。臨席而羨智不如退而讀書。

游海島志序之刻在戒師一方向之海也... 女身而之... 志之替也

順治二年二月廿七日

臨風藻

大軍大武從... 臣等胡言... 萬幸

五言古日海記

玉管吐陽年... 當此... 恩

至位上純胡古社名

七言古

去為... 今... 鷗... 涌... 泉... 泉... 泉...

五言古... 清情四字

明於... 五... 判...

五言古... 水鏡

鏡... 左... 祥... 遣... 乃... 天... 五... 日...

日... 長恨... 長安

西征上在吏前助仁年二十七

中言征人

平山似与下洛神同其夜月送眉川能雲同髻上暉腰逐楚正細能隨漢帝應後分吏申珮為其念忘故

在唐觀祖法和尚小山

釋空海

看竹看花也出春人夸多吸漢亦新凡君在係小山色還藏君情不深塵

林子曰嘗聞蘇欽文先生昨日見性靈集後夜聞佛法信為詩以為某中并一其詩曰因林福所草堂曉之寶之夸聞一鳥一鳥有夸人且心夸公雲水俱了之然今於地國法編載在唐一化一首

明治十年青其家藏宋館書以低宋三葉尚
竹心者時之編集係 十未三月廿四 藏之謹誌

